

国文学研究資料館報

第13号

昭和54年9月

源氏物語と私

(講演要旨)

エドワード・サイテンステッカー

私達、日本文学を研究している外国人が、よく人から聞かれることに、どうして日本文学・文学に興味を感じるようになったか、ということがあります。そんな時、正直な答をしますと聞いてきた人はあまりよろこばないので代りに具合のいいことをいいます。例えば、子供の頃から遠い日本という国にそこがれをもつていたとか、岡倉天心に魅かれたとか、西洋という物質文化に倦きて東洋の精神的文化に興味を持ったとかです。しかし本当の話は、ただの偶然だったということ。あるいは、私と日本との関わりは戦争の落し子であったといった方がいいかもしれません。実際、少、青年期を通じて、私は日本に対して全く興味を持ったこ

とはありませんでした。ただ偶然に太平洋戦争開戦時に大学を卒業して海軍日本語学校に入ったという、その偶然にすぎなかったのです。事実学生時代は文学を専攻しましたが欧米の文学についてでした。日本文学との関わりは、このように極めて消極的なものでしたが、しかし、こと源氏物語を追及し出す動機というのは、それと違ってもっと肯定的なものでした。その源氏物語との出会いの感激、そして源氏物語がいかに私の文学研究の中心的なものになっていくかということは今からお話したいと思います。

先程申しましたように、先ず私は偶然にも日本語学校に入学しましたから少しは日本文化をも勉強しよう

源氏物語と私

一 文献資料部事業報告……大久保正……7
 二 研究情報部事業報告……古川清彦……8
 三 整理閲覧部事業報告……本田康雄……9
 四 評議員等名簿・人事異動………12
 五 漢字データ処理用ソフトウェアについて………15
 六 宮沢彰………15
 七 昭和五十四年度秋季学会開催一覽………16

かと思いましたが。その時、日本文化を抽象的なものとしてでなく、もっと内実を識りたいと思いました。それで先ず文学から始めたのですが、一番最初に読んだ長篇がアーサー・ウェリーの翻訳した源氏物語でした。つまり私の日本文学研究の事始めは源氏物語でした。それから三十年間源氏物語を中心として研究し、また翻訳してきましたが、源氏の翻訳が終ってしまつと、そのあとやりたいものがなかなか見つかりません。思想、文化史など研究してもいいと思つてもみませんが、源氏物語の翻訳以後ではあまり気が進みません。普通、文学史などは本當の学問という分野に入りますが、翻訳は入らないという風に欧米の大学でも日本でも見られているようですが、私は翻訳はたいへん必要なのだと考えます。最近、私の源氏物語英語訳とシフエール教授の仏語訳との違いが色々取沙汰されていますが、私の場合はできるだけ口語的にしました。シフエール教授のは古い文章になっています。翻訳としてどちらが適当かということがありますが、私の立場からいうと源氏物語の文章はあの時代のことばとしては口語的なものに近かったと思います。当時の読者にとつて源氏物語の文章は決して古めかしいものではなかったと考えます。私は翻訳とは真似ごとであると思ひます。従つて、翻訳はできるだけうまく真似ることが必要であるということです。山下宏明先生は今「カタリ」ということをお話しされましたが、源氏にもそういう「カタリ手」というものがある。つまり紫式部という「カタリ手」が出てくると思つたのです。「給ふ」という動詞が出てくる毎にそれは「カタリ手」の存在を示しているのだと思つたのです。というのは、とりもなおさず源氏物語は口語に近いということ。ですからその感じを出すために私はできるだけ会話風な英語にしようとしたのです。シフエール教授のは今の読者が源氏を



読むと古めかしく感じるから、その感じにあたるような古めかしいフランス語を使用したのだと思います。それはどちらでもいいのですが、少なくとも、どのような文章で訳すかを決める前に、翻訳者は源氏物語の文体論をもっていなければなりません。その意味で翻訳、すなわち批評であるというのが私の考えです。そして翻訳は批評であるという意味あい、思想史、文化史の研究などという〈学問〉より上のものであると思います。しかも翻訳は源氏について語るといわずに源氏そのものを扱い批評しようという意味で、やはり一般にいわれている批評、評論よりも上であると考えられます。さて、私の日本文学研究の事始め

は源氏物語であった訳ですが、源氏を最初、そうおもしろい作品だとは思いませんでした。私は原文はもちろん、様々な翻訳などですでに三十四回程度は源氏を読んでいると思いますが、今でも、源氏のはじめの方はそうおもしろいとは思いません。賢木の巻、あるいは葵の巻までいかなければおもしろくならないと思います。帚木の巻にある有名な雨夜の品定め場面もあまりすぐれているとは思いません。源氏の後半部のものがたりに比べますと紋切型の人物描写、性格描写しか出ていなくて退屈です。源氏物語で本当に退屈な巻は四つぐらいあります。帚木、竹河、匂宮、紅梅です。このうち竹河、匂宮、紅梅は後半部にある巻ですが、後半部は結構おもしろいからその三点を除いてもおもしろく読めます。けれど帚木だけはどうしようもありません。それでも源氏全般についていえば、源氏にはやはり何かある。何やらゆかしということを感じるのです。

ところでこの何やらゆかしという、何やらとは何でしょうか。それは海外文学を読むとき、自国の文学になんか見つけるといふ喜びではないでしょうか。フランスの小説家ジ

イドはヘンリー・ジェイムズがきらいでした。が、その理由は、ヘンリー・ジェイムズがあまりにもフランスらしかったからです。つまりフランス人が英米文学を読むときはフランス文学にないものを求めていたからです。ヘンリー・ジェイムズの文学はフランス文学と同様、まとまりがよく恰好が良かったのです。私が日本文学を読んだ時もやはりそれと同様で、自国のアメリカ文学にないものを日本文学の中に捜そうとしました。源氏物語も賢木の巻あたりまではおもしろくありませんでしたが、しかし、アメリカ文学にないものを見つけたことはできました。それは〈抒情〉というものでした。源氏物語の抒情、つまりそれは源氏独特の自然描写でありました。これは源氏のたいへん大きな魅力の一つです。私の知っている西洋文学で、源氏物語程自然が絶え間なく連続的に出てくる小説はありません。ほとんど頁ごとに何の季節であるか、月の相は何であるかということまでがでています。西洋文学では詩歌のジャンルで、それに当るようなものがあるとありますが、小説ではまずそういうものはないと思います。最初源氏物語を読んだ時は、またたいへん不思議な小説だとも思いました。これは明らかに室内の小説です。しかも、活動範囲の限られている女性や、大人しく動きの少ない人物達が描かれている室内小説であるにもかかわらず、屋外が充分に描かれている。そして登場人物達はその屋外の自然と一緒に生き、また生き長らえているのです。何やらゆかしと思ったところはその点でした。また、こうも思いました。もし風流という言葉が文字通り風と流れという意味でしたら、源氏物語はまさしく風流小説であると。残念ながら風流はそういう意味ではなく、原典は論語にあり、本来の意味は前代の遺風、先人の余流ということ、いわば古いもの、ということ、文字面に添って、風と流れという意味では源氏物語は風流小説です。なぜなら極端な室内小説にもかかわらず、風と一緒に川と一緒に流れるといったような屋外の小説になつてもいるからです。つまりそれは室内と屋外の間で境界がないということです。最初私が源氏物語を読んだ時、このことにはたいへん驚きました。西洋には全くない小説でしたから。

ところで、源氏物語は世界中で一番古く、また偉大な小説であると

くいわれます。しかし小説とはいいたい何でしょうか。私はまだ確たる結論を持っている訳ではありませんが、大体において小説とは劇的なジャンルのものだといえると思います。劇的も色々な意味があります。その一つは派手な、猛烈な、ということだと思います。が、私が劇的という言葉を使うときは、そうではなく、抒情的なもの、対極にあるものとして考えます。抒情的なものと、作者は直接に読者に語りかけます。私はこう思う、こう感じると。しかし劇的なものはそうではなくて人物を通じて読者に語りかけます。いい小説は色々な意味を暗示したり、教訓、メッセージを含んでいたりします。しかしその教訓なり、メッセージなりを直接読者に話すのではなく、登場人物という媒体を通して伝えます。その意味で抒情的なもの、劇的なものとは全く違うのだと考えます。芝居はもちろん、小説も西洋では十九世紀以来の写実小説は劇的なものになっています。しかし不思議なことに源氏物語は抒情を描き出しながら、小説として劇的なものなのです。

ところで、源氏物語は比較論者によって、よくフランスのブルーストの作品と較べられます。例えば形式について、ブルーストの「失われた時を求めて」と「源氏物語」とを比較したりしますが、その比較の必要性を私は認めません。ブルーストのそれはきれいにまとまった小説ですし、構成は完璧です。しかし源氏物語はきれいにまとまってはいない。その意味では、源氏物語はアンドレ・ジイドの説ですと英米文学に近いということになります。袋小路が沢山あって、全々解決していない事件が沢山あったり、矛盾があつたりします。それは必ずしも悪いことではないのですが、とにかく形式が極端に違うので比較の必要性などないのです。

それから、心理的写実主義として源氏物語とブルーストの作品を比較することがあります。若干の疑問はありますが、形式論で比較するよりも、この比較の方がよりましたという気がします。源氏物語の人物描写、性格描写というものは、心理描写によつてではないのです。つまり、ある人物の心境の中に立ち入つて何を考えているかを分析するというようなことは源氏物語には案外少ないのです。小説としての源氏の不思議の一つです。ただし、源氏物語の後半部、若菜あたりから、それはある程度みられるようになります。つまり冥想的な分析の場面が多くなります。それにしても紫式部とブルーストを比較すると、ブルーストの方がはるかに心理描写が多いです。ただこの比較は、それによって源氏物語の不思議の部分が、よく照射されるという意味において意義があると思います。くり返しますが、源氏物語では人物の性格は読者によくわかるようになっていますが、しかしその描写が心理分析によつてではないということですから、これは源氏物語の不思議の一つで、魅力の一つであります。その特異の手法については、これから色々研究しなければならぬ問題ですが、たいへん意味のある問題だと思います。例えば、宇治の中君と浮舟という同じような人物で、二人ともほとんど喋らない登場人物がいるのですが、二人を比べてみると、浮舟の方がはるかに印象的になっています。しかし読者に印象を与えるのは心理分析ではないと思います。もっと神秘的なものです。この生き生きと描かれている浮舟に比べ、宇治の中君はどちらかというとおもしろくない人物です。源氏物語の中で浮舟の如く魅力ある人物は他にありませんが、そういう人物を創造できる紫式部の性格描写はうまい、とい

うほかありません。魅力ある小説というものは個性ある人物を多く登場させていますが、源氏物語の登場人物たちも、十人十色の個性をもっています。しかし西洋の小説の技法とは全く違うのです。さて、私は今まで源氏物語の他、近代・現代文学の作品も色々翻訳してきましたが、翻訳する作品を選ぶ時は、源氏物語と同じような魅力をもつ作品を捜しました。そして、その魅力を谷崎潤一郎先生と川端康成先生のものにみつけることができました。ただし川端先生の作品は、より紫式部に近いと思いました。その作品は抒情的で、本当に不思議な日本人的な、というべき性格描写、人物描写がされておりました。二十年も昔のことですが、国際ペン大会が東京で開かれることになったときその準備委員会の席上で、川端先生が、どうも私は西洋の作家との社交は苦手ですといわれました。その理由を聞かれて川端先生は、西洋の作家と日本作家の関心とは根本的に違う。西洋の小説家はやはり人間中心になつていて、性格描写が中心になつている。しかし東洋、特に日本の小説家は人間に興味なく、人間を創ることが下手であるといわれました。同席

していた芹沢光治良先生は「雪国」の駒子の例をあげて、「それでもいいでしょう」といいましたが、川端先生は「いや、あれはおぼけです」と簡単にいわれました。私は駒子をおぼけだとは思いませんが、川端先生のいわれたことはわかるような気がしました。私は三十年来源氏物語に興味をもち続けてきましたから、源氏の登場人物たちに感じていたものが、川端先生のいうおぼけだと思つたのです。源氏物語では自然を比喻にして人物描写をすすめるというところがありますが、描写の手法がそんなにはつきりしていないところでも、とにかく登場人物とその背景の自然との間にほとんど距離がないということなのです。西洋の十九世紀以降の写実小説ですと、自然と人物はつきり離れています。いやむしろ自然と戦っている場面が多いとさえいえます。ところが源氏物語では人物はきらめくように、ちらつと出てきて活躍し、まさしく自然の如く消えていきます。いつも背景になつて自然と活躍する人物は溶けあつているのです。川端先生の登場人物の性格描写などは紫式部の手法とそっくりだと思ひました。それは新鮮な感じを読者に与えずにはおき

ません。

それから谷崎文学についてですが、谷崎文学には明らかに源氏物語の影響がみられます。その中心はやはり文章だと思つていますが、谷崎先生の文章は源氏物語の訳をした頃から確かに変わってきています。内容的なものでは、例えば「細雪」の雪子、これなどは宇治の大君に似ているといえます。雪子のモデルは、谷崎潤一郎の奥さんの妹だといわれておりますが、私は雪子の造形には二人のモデルがあつたと思つています。一人は今いいました奥さんの妹、そしてもう一人は宇治の大君だと思つてます。それからまだ翻訳しておりますが、谷崎作品の中で特に抒情的な作品、例えば「吉野葛」などの作風は源氏に似ています。

以上主観的、個人的な話になつてしまいましたが、一人の外国人が日本文学を追究する上で、源氏物語の存在がいかに重大なものであつたかを、わかつていただければ幸せです。

(国文学研究資料館客員教授、コロンビア大学教授——昭和五十四年六月三十日当館主催の第十回公開講演会における講演要旨)

新収資料紹介⑩

鈴木服書入本詩経集註

本書は「書林豊斎遺傳伴刊」の刊記のある、刊年不明の朱子註「詩経集註」(外題・内題同じ)八巻八冊の木版本の句読・返り点・送仮名に、朱又は墨筆による改訂を施すほか、その頭部欄外に、鈴木服等が墨及び朱筆で綿密な書入を施したものである。波引紙表紙袋綴、縦二七・九センチ、横一六・五センチの縦長本で、本文は四周双辺縦一九・九センチ、横三・六センチの無界罫紙に九行に印刷されているが、頭部に四・一センチの欄外空白があり、ここに書入が施されている。書入は複数と認められ、鈴木服の書入のみではないが、各冊に「服按」・「服曰」と記す服説は明らかに服自身による書入と認められ、「服」の名を明記するものだけでも、巻一、四、巻二、四、巻三、七、巻四、一、巻五、六、巻六、四、巻七、三、巻八、三、計三二個処にわたつて、服の考説に接することができ、言うまでもなく、服は本居学派の国語学者として、「言語四種論」「活語断統譜」等に国際的にも注目すべき卓抜な業績を挙げて国語学史を飾る人であるが、本来服は、本居直長と「直昆堂」の古道論をめぐつて論争した市川鶴鳴に学んだ古文辞学派の儒者であり、尾張藩に禄任して明倫堂の儒者を勤め、天保四年、七十歳ではじめて明倫堂教授となり、国学を講じるに至つた人である。し

たがって、儒学者としても、「大学参解」「論語参解」「四書雑録」等多くの著述があつたことが知られるが、その大部分は戦災のために灰燼に帰し、その漢学者としての面目を窺うべき資料は今日極めて乏しく、「離屋学訓」「離屋集初編」以外、具体的にその考説を窺うべき資料は極めて少ない。その意味で、本書入本は、服の訓話の実際を見るべき資料として、貴重なものと言える。

なお、本書における服以外の書入の筆者は明らかでなく、本書の伝来についても確かでないが、本書各冊巻頭には「真読書樓」の朱角印、および「乾堂」の朱丸印が押しあつてある。そして当館高田信敬氏の調査によれば、乾堂は尾張の神学者で漢学に詳しくかつた河村益根(秀根の第二子)の号であるから、或いは益根の書入も入っているかも知れない。服と益根とが交渉を有したか否かなどの点を含め、今後の調査・研究を待つべき問題が多い。(大久保 正)



国文学年鑑について

国文学研究資料館では創設以来「国文学研究文献目録」を毎年一冊ずつ編集刊行して、論文の氾濫する現今の国文学界の研究情報の整理提供に一役買って来た。今年五十四年三月には書名を「国文学年鑑」と改称し、内容も従来の文献目録に広く学界の情報を加えてその充実を図った。そこで丁度よい機会でもあるので、この年鑑について若干の説明を加え、利用者の方々の参考に供したい。

始めにこの年鑑に至るまでの過程について述べておく。周知のことではあるが、この年鑑の前身は東京大学国文学会編の「国語国文学研究文献目録」であり、昭和三十八年分の目録から四十五年分の目録まで、毎年一冊ずつ刊行されたものであった。それを国文学研究資料館創設と同時に引継ぎ、書名を「国文学研究文献目録」と改称し、第一冊目の四十六年分を四十九年三月に出版し、以後、年一冊の割で五十一年分までを出版し、五十二年分の目録から「国文学年鑑」に切り変えたのであった。このように書名から云って三期に分か

れるのであるが、二期に於て若干の内容の変更があった。

まず、書名の変更。書名から「国語」の文字が消えたのは、国語学関係の論文採録を取り止めたということでは決してなく、採録範囲・採録標準は従前通りであった。ただ、国語学関係の論文目録には既に国立国語研究所の「国語年鑑」があるので、当館では国文学研究の立場からの使いやすいかを検討していたのであり、具体的には、四十六、四十七年の文献目録は従来どおりの論文配列であったが、四十八年分からその配列を変更した。たとえ国語学の論文であっても、或る作品或る時代に限定された論文は、その作品その時代の国文学の論文の後に続けて配列し、特定の枠のからならないものを文学一般の中に配列したのであり、国語学と云う大枠を外したことであった。

あるが、その複出を取り止めた。第三に、書評と単行本解説に付していた参照頁の注記を廃止した。これらを廃止した理由は手間暇の問題であった。

この目録は四十六年分が四十九年三月に出たように、当初から一年半ほどの遅れがあった（翌年の八月頃刊行が理想であろうからそれから更に一年半の遅れである）。この遅れを埋めるのが編集室の最大の目標であったし、もう一つ、価値ある情報を盛り込んで年鑑に発展させようとする企画があった。この二つの目標を一日も早く達成するためには、編集室の現有スタッフだけでは動きがとれず、手間のかかる仕事を止めるのも一つの手段でありえた。一方、館外からの委員の方々の、企画及び実務に亘る御協力を得て、また、年度予算のやりくりによつて五十三年度末に五十一年分「国文学研究文献目録」と五十二年分「国文学年鑑」の二冊の刊行を見、大幅な遅れを取りもどすと共に目録を年鑑に発展させたのであった。以上が年鑑に至る過程であるが、次に年鑑の内容について述べておく。

年鑑は、学界展望・雑誌記要論文

目録・単行本解説・学界消息の四部から成る。つまり、学界展望と学界消息の二部が新たに加わった部分である。この追加分について云うならば、例えば学界展望、これは既に「国文学」には詳しい展望があり、「国文学」にも学界時評があり、しかも年間に膨大な量の論文が生産され、展望のあり方そのものも考え直さなければならぬような時期に、同じ様な展望を一つ増やすことがどれほどの意味を持つかという意見はあった。しかし論文名を羅列的に並べる式の展望は別として、同じ年の展望でも筆者の立場や視点によりかなり違ったものになるはずであり、学界に与える刺激は大であろうと判断したわけである。年鑑にはその年の論文と著書が網羅的に集められているので、紹介はそれに譲り自由な展望が期待される場所である。

また学界消息についても、その一年間の国文学界の研究動向が分かるような記事、或はのちのちまで記録に留めておきたい記事、またはあると便利な記事などを考えて、学会一覽、学会研究発表一覽、新指定文化財目録、科学研究費等交付一覽、受賞一覽、訃報の六項の内容を決めた。ただ、これらの作成に当っては採録

範囲・基準などを決めてあつても、個々のケースでは判断に迷う場合もあるし、情報の収集の方法にも問題のある場合がある。六項目の内、計報を例に取ると、これはその年に逝去された方々の略歴・業績・没年等を記したものであるが、この情報源は新聞や「古書通信」などの計報欄の記事であつて、著名人しか載つておらず、中堅の研究者名は逸してしまふ。どのようにして多くの情報を得るかは、計報項目に限らず今後の課題である。以上増補分について述べたが、年鑑の本体である目録部分について述べておきたい。

雑誌記要論文目録に採録する論文は、勿論価値判断することなく網羅的に採り入れており、また隣接諸学科の論文、例えば歴史学、民俗学、比較文学などからも関連の深いものは採録している。編集の立場としては、出来るだけ多くの論文情報を出来るだけよく整理して提供すべきだと考える。論文そのものの価値評価は読者の判断領域だと考えるからである。もう一つ、採録された論文は全てを資料館所蔵の雑誌「紀要類」から採録したわけではない。大雑把な云い方で恐縮だが八九割は館所蔵の本からであるが、残りは主として国

会図書館と富士短期大学図書館を利用させて頂いている。

単行本解説の方はまず出版情報の収集から始まる。目録が遅れていた時期は「出版年鑑」を利用して来たが、現在では情報漏れを後でチェックするのに見る程度であつて、出版情報の収集は本屋のパンフレット、新聞広告、「これから出る本」、「ウィークリー出版ニュース」、「納本週報」、「印刷カード速報」などによりリストを作成する。情報の漏れを少なくするには、より多くの情報に目を通すことであり、これは雑誌論文のカード採りも同じことである。年間六千点の雑誌論文を採ることは、六千点のカードを書くことではあるが、その裏の見えないところで、何倍もの論文タイトルを目で追っているのであり、うわのそらで大学の紀要の目次を追っていると、その中の一篇の国文の論文を見落しかねないのであり、せつかくの努力が無駄になるのである。単行本解説は先のリストをもとに文献目録委員の方々に執筆して頂いている。この解説で一つ注意しておきたいことは、近代文学分野だけは、純粋な研究書だけを解説して、全集、文庫本などの作品集の解説はしていないことである。古典

文学では作品の翻刻なども解説しているの、片手落ちの感はあるが、近代文学は一般向けのものも多く、どこまでが研究文献であるかの判断もむずかしく、また現在生産されている現代の作品を全て取り込むか、どこで切るかの問題もあり、現在手をつけられないのが実情ではある。

以上「国文学年鑑」に至る過程、年鑑作成の基本姿勢や問題点について述べてみた。最後に一言、この年鑑の中心部分はいくまで論文目録と単行本解説であると編集担当者は考える。ちなみに数字をあげると、年 雑誌論文 単行本 総頁数 38年 約四四〇〇 二六七 二三八 51年 約六四〇〇 八二三 四四〇 右のように発刊時の38年分の目録と年鑑移行の前年の51年分の目録とは研究論文数に大きな差があるのであり、これらの研究文献は年々増加の一途をたどるばかりである。これらの情報を出来る限り多く収録し、また適切な分類配列をして、年鑑の質を高めてゆきたい。今までは遅れを取り戻すことが主眼であつたが、これからは内容の向上に務めたい。年鑑作成に当って特に御協力を賜った学会・図書館の方々に御礼申し上げるとともに、より一層の御助言

並びに御協力をお願いする次第である。(編集室)

3rd International Conference on Japanese Literature in Japan

第3回 国際日本文学研究会

日 程	1979年11月15日(木)午後	研究発表
	16日(金)午前	研究発表
	午後	シンポジウム「民間伝承(フオークロア)と文学」
会 場	国文学研究資料館大会議室	
参加費	3,000円(当日受付)	
主催	国文学研究資料館	
連絡先	国文学研究資料館研究情報部情報室 (TEL. (03)785-7131内線401)	

十一月十七日(土)公開講演会

主題 歌舞伎—スライド使用—

国立劇場芸能調査室 服部幸雄

「歌舞伎の世界と趣向」

立教大学教授 松崎 仁

「男の世界、女の世界—近世戯曲の構造をめぐって—」

文献資料部事業報告

大久保 正

当部においては、本年度も、北海道・東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州の各地区にわたり、四十五カ所七千点の調査と、二十五カ所五千点のマイクロフィルム資料収集の計画を立て、着々と実行しつつあるが、将来にわたって順調に調査・収集を進めるためには、関係各位の御理解と御協力が不可欠であることを痛感している。ここに多大の御協力をいただいた図書館・博物館・文庫・所蔵者の各位に厚く御礼申し上げますと共に、今後いっそう所期の目的に向かって事業の輪を拡げて行くことができるよう、大方の御理解と御協力を期待してやまない。

次に昭和五十四年二月一日以降、同年六月末日までに当部で行った事業の概要を報告する。

昭和五十三年度第二回国文学文献資料収集計画委員会の開催

二月二十七日、当館中会議室において開催、昭和五十三年度の文献資料調査収集結果概況を説明すると共に、昭和五十四年度調査収集計画の

基本方針について有益な御意見をいただいた。国公立機関所蔵文献資料については更に積極的な協力を働きかけること、一般文庫・寺社・個人等所蔵文献資料の収集については格段の予算的配慮が必要との一致した示唆があった。また漢籍仏典の収集範囲・カラー撮影の問題が討議され、さらに検討することとなった。

昭和五十四年度国文学文献資料収集計画委員会の委嘱について

本年度の収集計画委員として、再任五名、新任五名、計十名の方々に委嘱し、四月一日付をもって発令された。(別紙名簿参照)

昭和五十四年度国文学文献資料調査員の委嘱について

本年度の文献資料調査員として、北海道・東北地区六名、関東地区二十五名、中部地区十五名、近畿地区九名、中国・四国地区八名、九州地区九名、計七十二名の方々に(別紙名簿参照)を委嘱した。ほかに、特定事項についての調査・収集に御協力いただくための特別調査員若干名を委嘱する予定である。

昭和五十四年度第一回国文学文献資料収集計画委員会の開催

五月十六日、当館中会議室において開催、互選により橋本不美男氏を委員長に選定した。文献資料部より本年度の調査収集計画案を説明し、意見交換の結果承認された。議長より調査・収集の問題点について具体的に述べるよう要求があり、文献資料部側から、(一)撮影許可条件に差があること、(二)文献資料所蔵図書館・文庫・個人等から、撮影開始に当たって当館担当責任者を打合せ・撮影指導に派遣するよう要求されるケースが増加しているが、予算の関係で応じ切れない現状であること、(三)遠隔地の撮影において撮影ミスが生じ易いことなどについて具体的説明を行った。その後、質疑応答が行なわれ、収集の対象・範囲の規準をいかにすべきか、特に漢籍の収集範囲が問題とされ、東洋文化研究所における漢籍調査の実情も調査し、国文学文献資料という立場から館としての方針を検討することとなった。また、絵巻物・絵本等についてはカラー撮影が望ましいという意見が多く委員から出され、また在外国国文学文献資料の収集に着手して欲しいとの強い要望がなされた。当部としても検

討を続けて来た案件であり、今後いっそうその実現に努力することを約した。また沖縄の調査・収集を早急に具体化するよう要望があり、当部としてもその実現に努力中である旨答弁を行った。

国文学文献資料調査員会議(総会)の開催

五月二十二日、当館大会議室において開催した。その次第は左の通りであり、会后、調査員による調査・収集のための活動が着々と進められている。

一、開会の辞

二、館長挨拶

三、出席者紹介

四、議事(その一)

(1)昭和五十四年度国文学文献資料調査員の委嘱について

(2)昭和五十三年度までの文献資料調査収集結果について

(3)昭和五十四年度の文献資料調査収集計画について

(4)当館からの要望

(5)議事(その二)

(1)国文学文献資料調査要領の説明

(2)その他

六、閉会の辞

七、地区別・文庫別調査・収集打合せ

(文献資料部長)

研究情報部事業報告

古川 清彦

昭和五十四年四月一日をもって当館に整理閲覧部の新設があったので、それともない研究情報部の機構の変化があった。すなわち従来の研究情報部の整理閲覧室（マイクロ室を含む）・参考室等が整理閲覧部を新たに形成し、情報室・編集室・情報処理室の三室が研究情報部を形成することになったのである。「国立大学共同利用機関組織運営規則」第十三条の二によれば「研究情報部においては、国文学に関する研究文献および研究に必要な情報の調査研究及び収集を行う。（史料館の所掌に属するものを除く。）と規定されている。研究情報とは何かという根本に立って、今後の情報活動の一層の充実をはかりたい。「国文学研究文献目録」は「国文学年鑑」に移行した。国際日本文学研究集会の意義は一層注目されてきた。計算機による目録編集や資料管理システムの運用も進捗している。

以下各室毎に状況を報告する。
 (一)情報室。第三回国際日本文学研究集会を本年十一月十五・十六日に開催することとし、参加募集要項を作

成配付し、準備を進行中である。新聞情報は、昭和五十三年版「国文学年鑑」用に記事の整理を行っている。
 また今年度から、研究情報部の五カ年計画の臨時事業として、従来ブランクとなっていた昭和三十七年以前の国文学研究文献の調査収集および目録の刊行を行うこととなった。今年はその第一年度として、主として雑誌・紀要等の調査収集を行うこととし、情報室が担当して、国文学関係の雑誌・紀要のバックナンバーの入手情報の調査および欠号補充等を開始している。

(二)編集室。昭和五十三年度において、五十一年分「国文学研究文献目録」と五十二年分「国文学年鑑」の二冊を刊行することが出来、まる一年分の遅れを取りもどすとともに、内容的にも年鑑と云う形に充実させることが出来た。本年度は五十三年分の「国文学年鑑」を三月末刊行予定で編集中であるが、これも将来においては刊行日を一月、十月と遡って、八月ごろに刊行するのが望ましいこ

学会誌・紀要等のバックナンバー寄贈のお願い

国文学研究資料館では、文献資料のマイクロフィルムによる収集とともに、かねて雑誌論文等研究情報の収集に努力してまいりました。幸い、関係各方面のご協力により、最近の刊行物につきましてはかなり網羅的に整備されてまいりましたが、当館発足以前のバックナンバーにつきましては、なおかなり欠号がみられます。

これらの収集には今後一段と努力してまいります。特に今年度からは、今までおかれておりました研究文献目録の出版が、前年分まで追いつき、「国文学年鑑」に発展いたしましたのを期として、従来空白となっておりました昭和三十七年以前の研究文献目録を五カ年計画で作成することいたしましたので、その論文採録のためにも、ぜひ、学会誌、紀要等のバックナンバーを整備したいと考えております。

現在、各大学関係学部・短大・学会等にご協力をお願いして、鋭意欠号の補充収集に努力いたしておりますが、何分過去のものであるため、既にそれら発行機関においても在庫のないものが少くありません。

ついては、もしお手もとの学会誌・紀要等のバックナンバーで、当館にご寄贈いただいでさしつかえないものがございましたら、左記にご連絡いただければまことに幸でございます。当館の所蔵と照合の上、欠けているものについてご寄贈をお願いしたいと存じます。あつかましいお願いをし、お手数をわずらはしてまことに恐縮でございますが、国文学研究の共同利用機関としての当館の性格を御配慮いただき、ご協力くださるようお願い申し上げます。

昭和五十四年九月

研究情報部

記

連絡先 一四二

東京都品川区豊町一の十六の十
 国文学研究資料館研究情報部情報室
 (電話) 03-1785-1711

担当者 山中光一・奥出 健

とではある。紀要は第六号を刊行予定である。

(三)情報処理室。当館のコンピュータシステムについて、昨年「国文学研究資料館報告」第1号をとりまとめたが、今年は当館で開発したシステムについて、第2号「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録作成システム」、第3号「漢字データ処理用ソフトウェア」、第4号「図書資料管理システム」の三つの報告をとりまとめ(第2号、第4号は整理閲覧室と共同)、関係方面に配布した。

経常的な事業である目録作成は、マイクロ資料については二冊目の一九七八年版を三月に発行し、引きつづき三冊目の一九七九年版の作成に着手している。

論文データは、昭和四十四〜四十九年の六年分をすでに入力している

整理閲覧部事業報告

本田 康雄

(一)整理閲覧室。昭和五十三年度第四半期においては、一年間発行を見合わせた(開館に伴って急増した新規サービスマニユアル等の処理と、電算機導入調整のため)目録等の編纂に力

が、引き続き蓄積のための入力を行っている。

今年度のシステム開発は、DBMS(データベース・マネージメントシステム)および昭和三十七年以前論文の目録と年鑑(目録索引部分)の作成システムの開発を行う。現在すでに運用中の資料管理システムの障害時の回復作業および業務統計取得機能の向上をはかる改良を行う計画もすでに実現している。このほか一九八〇年版以降のマイクロ資料目録の内容の充実、語彙索引システム、等将来のための検討も引きつづき行う。

なお今年度からオペレータ委託先が変わり、時間外等のバックアップ体制も強化されたので、マシンの運行も一層円滑になった。

(研究情報部長)

「国文学研究資料館報告第2号」、
「図書資料管理システム」(同、第4号)を刊行した。

ひきつづき四月から始まった昭和五十四年度第一四半期は、整理閲覧部の新設が成り、これまで研究情報部内にあった整理閲覧室、参考室及びマイクロ室が分離し、新たに部として事業を遂行することとなった。

事業計画にこれまで以上にサービス部門としての特徴をもたせ、参考室の改装など、より利用の便を図るよう努めている。

(1)受入業務。逐次刊行物の受入システムを図書資料管理システム(CS)に連ねることによって、従来の手作業事務の改善を始めた。この間、その目録を出版した。

(2)整理業務。マイクロ資料目録は前述のとおりであるが、さらに今年度分の作業を進めており、年内に第3巻を作成すべく努力している。若干滞りしていた単行書についても、第一四半期において、正常な状態に復するであろう。

(3)閲覧業務。五月末には、利用登録者数が三〇〇〇人を超えた。さらに、利用者援助として、また広報活動として新しい利用案内を作り、入室者及び希望者に配布している。

なお、加藤節子が助手となり、鈴木一正が整理係長に(東京商船大学より)、増井ゆう子が受入係に着任した。整理係長であった内藤英雄は東京工業大学へ転任となった。

(二)参考室。参考質問の受付、回答、参考用図書を選定。参考用資料の作成に従事している。参考用資料としては「館蔵活字本謡曲曲名索引」(部内資料として印刷中)、「漢籍類書項目索引」(作業中)などがある。国文学の普及業務として、(1)講演会は六月三十日(土)一時三〇分より

「平家物語の語り」名古屋大学助教授 山下宏明氏

「源氏物語と私」コロンビア大学教授・当館客員教授 エドワード・サイデンスティック氏

を開催した。参加者三二〇名で当館大会議室にあふれる盛況であった。

(2)展示会は、常設展示「名所と文学」(三月五日〜八月十一日)を開催し、うち六月二十二、二十三の両日は近世文学界の春季大会に併せ、当館蔵の近世文学関係の貴重書を中心とした「近世文学小展示」を開催した。なお、参考図書増加に伴い、参考閲覧室を拡大して書架を増設すると共に、常設のレファレンス・カウンターを

室の中央に配置して利用者援助を強

化することとした。

なお、阿部好臣助手、大倉加代子事務官が配置転換された（整理閲覧室より）。内田保廣助手、藤沢美智子事務官は退職した。

〔資料利用規程の改正について〕

主として資料管理システム（CCS）稼動のため「資料利用規程」の一部を改正した。すでに利用者には周知されている磁気による「資料利用カード」にかかわる諸点である。

またこの規程に基づいている「相互協力要項」の整備を行った。遠隔地の利用者は、各地の大学図書館を通して当館を利用する方法があることを知っていただきたい。サービスは文献（図書及びマイクロ資料）複写、並びに一部の紙焼写真本・単行書の貸出しである。

（整理閲覧部長）

共同研究

五十二年度から実施の共同研究は、昨五十三年度に共同研究委員会が設置され、共同研究にかかわる基本事項を審議することとなった。

そのルールにしたがって、五十三

年度は写本版本の二班にわかれ、写本班では、すでに五十二年度から実施されて来た初雁文庫解題研究を継続し、ほぼその目標を達成した。さらに五十四年度は、共同研究委員会の決定に基づいて、当館寄託の久松家蔵本の解題研究に取りくむこととなり、あわせて初雁文庫解題の最終処理（出版のための原稿整備等）も写本班が受けつぐ予定である。

五十三年度に発足した版本班は、年度いっばい、俳書解題のマニユアル作製を討議、その具体例として、酒田光丘図書館蔵俳書の解題に着手したが、五十四年度も引きついでおこなうこととなった。

（福田秀一・松田修）

海外研修

石塚英弘（助教授）

54年4月1日～54年4月7日

日米化学会合同コンgres情報

分科会出席講演（米国）

評議員会議の開催

本年度第一回評議員会議が去る七月二十日（金）午前一〇時三〇分から当館中会議室において石井議長ほか十四名の評議員の出席を得て開催され、管理運営の概況、昭和五十四年度概算要求及び昭和五十四年度事業等について評議が行われた。

国文学研究資料館報告第2号

「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録」作成システム

（内容目次）

- 1、目録作成のあらまし
- 2、データ記述
- 3、「国文学研究資料館マイクロフィルム資料カード」作成要領
- 4、システムの概要
- 5、旧帳票とテスト版目録
- 6、新帳票とマイクロ資料目録
- 7、現行システムの反省と将来の展望

一九七九 国文学研究資料館

国文学研究資料館報告第3号

漢字データ処理用ソフトウェア

（本号14・15・頁参照）

一九七九 国文学研究資料館

国文学研究資料館報告第4号
図書資料管理システム

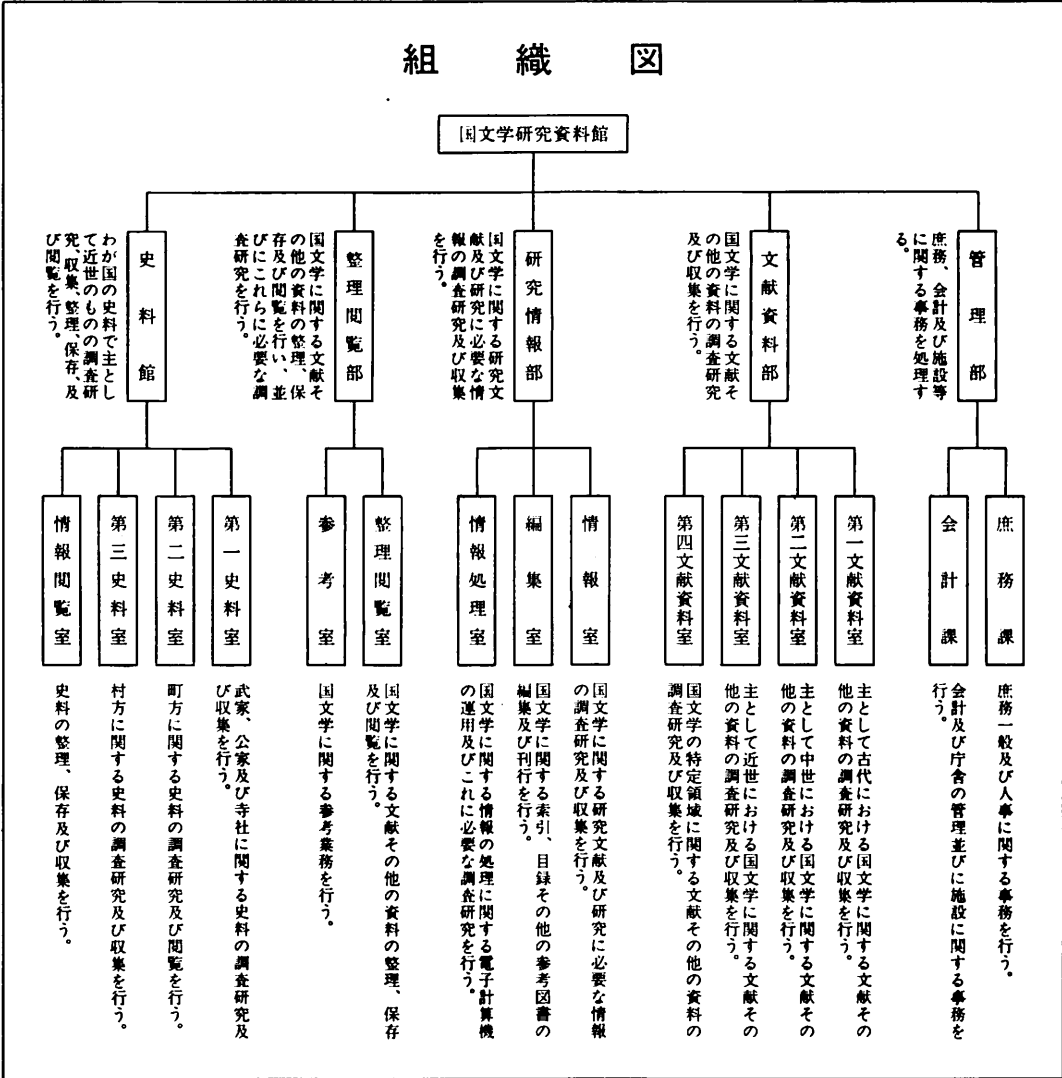
（内容目次）

- 1、システムの背景
- 2、システムの機能と操作
- 3、システム解説

- (1)ハードウェア環境
- (2)ソフトウェア環境
- (3)PDMを採用した理由
- (4)PDM概説
- (5)ファイル構成
- (6)オンラインプログラム
- (7)バッチプログラム

一九七九 国文学研究資料館

組 織 図



組織の改組について

国立大学共同利用機関組織運営規則（昭和五十二年四月十八日 文部省令第12号）及び国立大学共同利用機関の内部組織に関する訓令（昭和五十二年四月一日 文部省訓令第6号）の一部が昭和五十四年四月一日付で改正され、従来、研究情報部に置かれていた整理閲覧室及び参考室を整理閲覧部として組織の拡充整備が図られた。

それぞれの所掌事務については上の組織図のとおりである。

外国人研究員（客員教授）

- 昭和五十四年四月十六日
- 昭和五十四年八月十五日
- コロンビア大学教授
- エドワード・サイデンステッカー

国文学研究資料館評議員名簿

(任期昭和五三年七月一日、昭和五五年六月三〇日)

- 阿部秋生 実践女子大学文学部長 東京大学名誉教授
- 石井良介 東京大学名誉教授
- 白田甚五郎 同学院大学文学部教授
- 小田切 進 立教大学文学部教授 日本近代文学館理事長
- 久曾神 昇 愛知大学長 愛知大学理事長
- 児玉幸多 学習院大学文学部教授
- 小葉田 淳 京都大学名誉教授
- 小林清治 福島大学教育学部教授
- 齋藤 正 東京国立博物館長
- 佐々木八郎 早稲田大学名誉教授
- 佐藤喜代治 フェリス女学院大学文学部教授 東北大学名誉教授
- 谷山 茂 京都女子大学長
- 手塚富雄 共立女子大学文学部教授 東京大学名誉教授
- 豊田 武 法政大学文学部教授 東北大学名誉教授
- 野間光辰 皇学館大学文学部教授 京都大学名誉教授
- 秀村選三 九州大学経済学部教授
- 宝月圭吾 東京大学名誉教授
- 松尾 總 学習院大学名誉教授
- 松田智雄 図書館短期大学長 東京大学名誉教授
- 山本達郎 国際基督教大学大学院教授 東京大学名誉教授

昭和五十四年度

国文学文献資料収集計画委員会委員名簿

- 尾上兼英 東京大学東洋文化研究所教授
- 菊地功次郎 東京大学史料編さん所教授
- 築島 裕 東京大学文学部教授
- 角田一郎 帝京大学文学部教授
- 中田剛直 上智大学文学部教授
- 永積安明
- 野田寿雄 青山学院大学文学部教授
- 橋本不美男 富内庁書陵部図書調査官

樋口芳麻呂 愛知教育大学教育学部教授

昭和五十四年度

文献目録委員会委員名簿

- 水野 稔 明治大学文学部教授
- 浅井 清 お茶の水女子大学文教育学部教授
- 大矢武師 静岡大学教育学部教授
- 篠原昭二 東京大学教養学部助教授
- 杉本邦子 昭和女子大学文学部助教授
- 瀬戸 仁 神奈川県教育委員会指導部高校教育課主幹
- 曾倉 岑 青山学院大学文学部教授
- 浜野卓也
- 三木紀人 お茶の水女子大学文教育学部助教授
- 山口明德 東京大学文学部助教授

昭和五十四年度

情報検索委員会委員名簿

- 石綿敏雄 茨城大学教養部教授
- 稲岡耕二 東京大学教養学部教授
- 桜井宣隆 図書館短期大学教授
- 西村秀彦 東京農工大学工学部教授
- 堀内秀晃 東京医科大学文学部教授
- 水谷静夫 東京女子大学文学部教授
- 山本毅雄 東京大学大型計算機センター助教授

昭和五十四年度

国文学文献資料調査員名簿

- (北海道・東北)
- 片野達郎 東北大学教養部教授
- 金沢規雄 富城教育大学教育学部教授
- 佐々木久存 秋田大学教育学部教授
- 新藤協三 山形大学教育学部助教授
- 高橋伸幸 札幌大学女子短期大学部助教授
- 丸山 茂 弘前学院大学文学部教授

(関東)

- 青木賢豪 日本大学短期大学部助教授
- 浅見和彦 成蹊大学文学部助教授
- 池田和臣 茨城大学人文学部講師
- 伊藤 博 大妻女子大学教授
- 岩下武彦 東京女子大学文学部講師
- 岩下紀之 鳴友学園女子高等学校教諭
- 加藤裕一 実践女子短期大学助教授
- 上参郷祐康 武蔵野音楽大学助教授
- 川平 均 跡見学園女子大学講師
- 近藤瑞男 共立女子大学文学部講師
- 佐藤團久 関東短期大学講師
- 鳴中道則 東京学芸大学教育学部講師
- 杉山重行 日本大学経済学部講師
- 橋 りつ 東洋大学文学部助教授
- 枳尾 武 成城大学文学部助教授
- 土井洋一 学習院大学文学部教授
- 中嶋 尚 千葉大学教育学部教授
- 中田武司 専修大学文学部教授
- 成田 守 大東文化大学文学部助教授
- 延廣真治 東京大学教養学部助教授
- 松尾草江 東京女子短期大学講師
- 三角洋一 白百合女子大学文学部講師
- 宮本瑞夫 立教大学院短期大学講師
- 村松友次 東洋大学短期大学教授
- 渡辺秀夫 東横学園女子短期大学講師
- (中部)
- 宇野茂彦 愛知教育大学教育学部助教授
- 粕谷興紀 泉学館大学助教授
- 木越 治 富山大学教養部助教授
- 櫻井治男 泉学館大学講師
- 杉浦豊治 金城学院大学教授
- 須田悦生 静岡女子短期大学助教授
- 高橋 亨 名古屋大学教養部講師
- 田中喜美春 岐阜大学教育学部助教授

- 田中新一 愛知教育大学教育学部教授
- 長友千代治 愛知県立大学文学部助教授
- 長谷川 端 中央大学文学部教授
- 服部 仁 同明大学文学部助手兼講師
- 三保サト子 福井大学教育学部助教授
- 向角倉一 山梨県立女子短期大学助教授
- 安田文吉 南山大学文学部講師
- 〔近 畿〕
- 新井栄藏 奈良女子大学文学部助教授
- 井口 洋 奈良女子大学文学部助教授
- 大橋正叔 天理大学文学部助教授
- 越智美登子 滋賀大学教育学部講師
- 加納重文 京都女子大学文学部助教授
- 竹下 豊 大阪女子大学文学部助教授
- 長坂成行 奈良大学文学部講師
- 宗政五十緒 龍谷大学文学部教授
- 山本登朗 光華女子大学講師
- 〔中国・四国〕
- 朝倉 尚 岡山大学教養部助教授
- 芦田耕一 島根大学法文学部講師
- 熊本守雄 山口女子大学文学部助教授
- 田村憲治 愛媛大学法文学部講師
- 檀上正孝 広島大学教育学部助教授
- 山崎 誠 広島女子大学文学部講師
- 横井金男 香川県明善短期大学教授
- 横山邦治 広島文教女子大学文学部教授
- 〔九 州〕
- 荒木 尚 熊本大学文学部教授
- 今井正之助 長崎大学教育学部講師
- 小川幸三 熊本短期大学講師
- 工藤重矩 福岡教育大学教育学部助教授
- 白石一美 宮崎大学教育学部講師
- 田中道雄 鹿児島大学教育学部教授
- 中本 環 熊本大学教育学部助教授
- 原岡秀人 佐賀龍谷短期大学助教授

- 若木太一 長崎大学教養部助教授
- 〔文献資料特別調査員〕
- 久保木哲夫 都留文科大学文学部教授
- 杉谷寿郎 日本大学文学部教授
- 松原秀明 金刀比羅宮図書館嘱託司書
- 名和 修 陽明文庫主事
- 田中文雄 東海学園女子短期大学助教授
- 菊地 仁 山形大学人文学部講師
- 昭和五十四年度
- 国際日本文学研究集会委員会委員名簿
- 池田 重 千葉大学教育学部教授
- 井本農一 聖心女子大学文学部教授
- 臼田甚五郎 国学院大学文学部教授
- 長谷川 泉 学院大学講師(非)
- ドルドキン コロンビア大学教授
- 昭和五十四年度
- 共同研究委員会委員名簿
- 秋山 虔 東京大学文学部教授
- 稲賀敬二 広島大学文学部教授
- 佐竹昭廣 京都大学文学部教授
- 神保五彌 早稲田大学文学部教授
- 松崎 仁 立教大学文学部教授
- 昭和五十四年度
- 共同研究委員会委員名簿
- 池田俊朗 京北高校教諭
- 井上宗雄 立教大学文学部教授
- 尾形 仍 成城大学文芸学部教授
- 加藤定彦 立教大学一般教育部講師
- 雲英末雄 早稲田大学文学部助教授
- 谷地快一 東洋大学附属牛久高校教諭
- 中野沙恵 東京女子医科大学講師
- 三輪正胤 大阪府立大学総合科学部助教授

森川 昭 東京大学文学部助教授
 ※各委員会等の館内委員は省略

人事異動

(昭和五十四年三月～昭和五十四年七月)

(転入)

昭和五十四年四月一日付
 文部教官(整理閲覧部助手)
 加藤 節子

昭和五十四年六月十六日付
 管理部長 小 泉 武

(国立教育研究所より)

(転出)

昭和五十四年六月十六日付
 管理部長 渡 邊 章

(二橋大学へ出向)

(辞職)

昭和五十四年三月三十一日付
 文部教官(研究情報部助手)
 内田 保廣

(四月一日共立女子大学就職)

(併任)

昭和五十四年四月一日付
 文部教官(文献資料部教授)
 室 木 弥太郎

(金沢大学より)

(非常勤講師)

昭和五十四年四月一日～昭和五十四年三月三十一日
 文献資料部 徳田 武

(明治大学より)

ド（漢字／英数字いづれでも）を、当館のH-8195漢字プリンタ出力フォーマットに変換するもので、KHPの編集結果の他、ユーザプログラムのプリンタ出力を漢字プリンタ出力に変換できる。

これらによって作成された出力は、システムアウトプット（SYSOUT）のKクラスという所に蓄め込まれ、ジョブ管理の制御のもとで出力ライタによって順次自動的に漢字プリンタに取り出される。漢字プリンタを出力ライタ経由とする方式はまだ殆ど普及していないが、漢字プリンタを使用するジョブの競合によるシステム待ち時間をなくして運用上の効率をあげるのに非常に役立っている。

3. 実際の使用例

一例としてマイクロ資料、逐次刊行物目録作成システムにおける漢字データ処理用ソフトウェアの使われ方を見てみよう。（図-2参照）

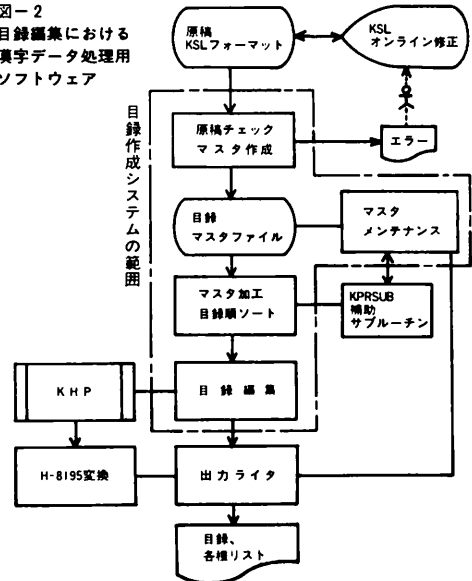
入力帳票に書かれた原稿はパンチ業者に発注してKSLのフォーマットで納入される。原稿の量が少い時には漢字ビデオ端末からKSLオンライン修正を通して、或は紙テープからKSL入力ユティリティで作成することもできる。

KSLフォーマットの原稿は目録作成の最初のプログラムでチェックされ、エラーが見つかったら、KSLオンライン修正システムにかけてエラー箇所を直す。この操作は、丁度プログラムをコンパイルして、エラー箇所をTSS端末からテキストエディタで修正するのと同じようなイメージで容易に誰でも行なえる。

チェックの終わったKSLフォーマットの原稿は、目録作成システムのプログラムでMARCに類似したフォーマットのマスタファイルに変換される。このマスタファイルに補助情報の付加や参照付加などの加工を行ない、目録順ソートして編集プログラムに行くのが、目録作成の基本的な流れである。目録順ソートの際には補助サブルーチンの「50音順ソートキー作成」が使用される。また作業用リストの作成やマスタアップデートなどのメンテナンスプログラム群では、KPRSUBによる漢字出力や、漢字↔EBCDIKコード変更などの補助サブルーチンが活躍する。

目録の編集はマイクロ資料目録の場合と、逐次刊行物目録の場合とで異なる。逐次刊行物目録作成システム

図-2
目録編集における漢字データ処理用ソフトウェア



の場合にはマスタファイルを編集してKHPに渡し、段組や頁割つけをKHPで行なうが、マイクロ資料目録作成システムの編集部分では、段組、頁割つけも行なって直接出力ライタにひき渡す。（これはマイクロ資料目録作成システムの開発時には、まだKHPが完成していなかったためである）。

マスタメンテナンスに於ける KPRSUB を用いて作成したリスト、マイクロ資料目録の出力、KHPからH-8195変換を通して得られた出力等はいづれも、SYSOUT（データセット）Kクラスという場所に一旦入れられる。この出力は英数字のラインプリンタと同じようにオペレーティングシステムのジョブ管理で管理され、スケジュールに従って自動的に漢字プリンタから出てくる。

4. おわりに

漢字データの処理はコンピュータソフトウェアの中でもきわめて若い分野で、英数字を扱う場合のように標準化されていない部分が多い。ここに述べたものは当館のハードウェア、ソフトウェア環境のもとでの一つの標準化であり、そのまま他ユーザにもあてはめられるものではないが、より一般的な標準化への1ステップになれば幸いである。

文献：国文学研究資料館情報処理室編「漢字データ処理用ソフトウェア」国文学研究所資料館報告第3号（1979）

—国文学研究資料館報告第3号の内容—

漢字データ処理用ソフトウェアについて

宮 沢 彰*

1. なぜ漢字データ処理用ソフトウェアが必要か

当館ではこれまでにマイクロ資料目録や逐次刊行物目録をコンピュータ処理によって刊行している。また閲覧貸出、利用者登録などの業務もコンピュータを利用して行なっている。これらのシステム開発は3年以上前から開始され、現在なお、よりトータルなシステムに向けての開発を継続中であるが、これらの開発の過程において、漢字データの基本的な処理に関するソフトウェアの不満が明らかになってきた。例えば漢字データを含んだファイルを作業用に(漢字プリンタに)プリントしてみるとか、データのうち一部を修正するといった、どのシステムにも共通して必要となる作業が、一々プログラムを作らないとできない。それもハードウェアやデータ形式が違えば使えなくなるような個別のプログラムにならざるをえない。これらはソフトウェアの生産性からいって極めて無駄の多いものである。これも漢字データ処理の分野が、英数字データの場合に較べて極めて浅い歴史しかもっておらず、ソフトウェア体系が追いついていない、という点に起因するのであろう。

当館ではコンピュータ導入当初からこの問題を重視し、基本的な漢字データ処理用ソフトウェア・ライブラリを設計開発して、すべてのユーザプログラムから共通に使用し、システム開発の効率をあげるように考えてきた。基本的なライブラリについては1979年3月段階でほぼ完成し、当館のほとんどすべてのシステムの中で使用されている。その詳細については報告書〔文献1〕に譲ってここには概要のみ述べる。

2. 漢字データ処理の概要

当館での漢字データ処理の流れは図-1のようになっている。図の中心部ユーザプログラムとある所が、マイクロや逐刊の目録作成システム等個別のプログラムであり、KSL ユティリティ、KPRSUB、補助サブ

作成の「漢字データ処理用ソフトウェア」である。また、KHP (漢字編集プログラム) はメーカ作成のアプリケーションプログラムである。

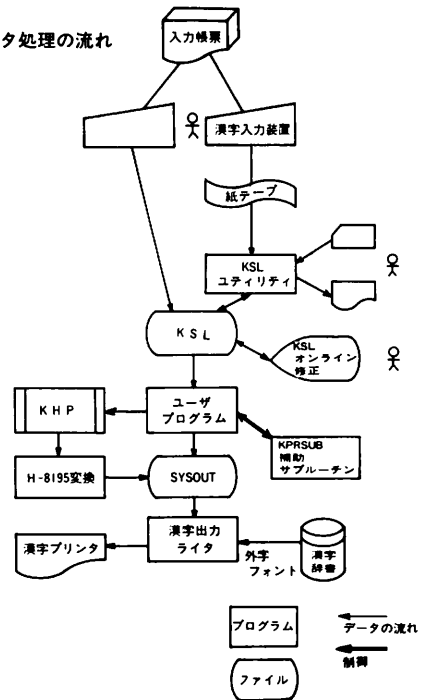
KSL (漢字シンボリックライブラリ) ユティリティは英数字でのいわゆる「シンボリックライブラリアップデート」ユティリティに対応するもので、漢字の原稿データを入力、プリント、修正するためのプログラム群である。

KPRSUB (漢字出力サブルーチン) はプログラム言語PL/I用のサブルーチンであり、漢字プリンタ出力を普通のラインプリンタ同様に手軽に処理できるようにしたものである。

補助サブルーチンは50音順配列のような漢字データ処理の基本的機能をPL/Iから容易に扱えるようにしたサブルーチンライブラリである。

H-8195変換は、一般のプリンタ制御文字付レコー

図-1
漢字データ処理の流れ



* 国文学研究資料館研究情報部情報処理室

昭和五十四年度秋季学会開催一覽

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の秋季大会予定は次のとおりである。学会は五十音順、以下①事務局（東京都は省略）②大会開催日③会場。

- 解釈学会①豊島区北大塚三―二九―二教育出版センター内②八月二四―二五③筑波大学学生会館
- 近代語学会①世田谷区太子堂一―七七昭和女子大学内②一二月八日③昭和女子大学
- 国語学会①千代田区神田錦町三―一―一武蔵野書院内②一〇月二〇―二一日③東北大学
- 古事記学会①千葉県市川市国府台二―一八―三〇東京医科歯科大学教養部歴史学研究室内②予定なし
- 古代文学会①横浜市緑区奈良町一六六五町方和夫方②予定なし
- 上代文学会①千代田区神田神保町三一―二 共立女子大学文学部日本語学研究室内②予定なし
- 説話文学会①千代田区三番町六〇二松学舎大学国文学研究室内②予定なし

なし

- 全国国語国文学会①世田谷区太子堂一―七昭和女子大学日本語学研究室内②一〇月一三―一五③群馬大学
- 中古文学会①神戸市東灘区森北町六一―二三甲南女子大学文学部国文学研究室内②九月二九日―一〇月一日③北海道大学（和歌文学会と合同大会）
- 中世文学会①世田谷区駒沢一―二三一駒沢大学文学部国文学研究室内②一二月一七―一八日③龍谷大学
- 日本演劇学会①新宿区西早稲田一―六一早稲田大学演劇博物館内②一二月四―二五③大阪大学文学部（第一日）、国立民族学博物館（第二日）
- 日本歌謡学会①渋谷区東四―一〇二八国学院大学文学部白田研究室内②一〇月六―七日③上田女子短期大学
- 日本近世文学会①渋谷区渋谷四―四一―二五青山学院大学三号館野田研究室内②一二月一〇日―一二日③皇学館大学

- 日本近代文学会①千代田区紀尾井町七上智大学文学部国文学研究室内②一〇月二七―二八日③金沢大学学生会館
- 日本口承文芸学会①渋谷区東四―一〇二八国学院大学文学部白田研究室内②一〇月二七日③国学院大学
- 日本文学協会①豊島区南大塚二―一七七―一〇日本文学協会②一〇月二〇―二一日③奈良教育大学
- 日本文学風土学会①世田谷区太子堂一―七昭和女子大学日本語学研究室内②一二月一日③昭和女子大学日本文芸研究会①宮城県仙台市川内東北大学文学部国文学研究室内②一二月一〇日③東北大学文学部
- 俳文学会①八王子市東中野七四二中央大学文学部国文学研究室内②一〇月一三―一五③秋田経済大学表現学会①愛知県豊田市長久手町長湫字片平九愛知淑徳大学国文学研究室内②予定なし
- 仏教文学会①横浜市鶴見区鶴見二―一三三鶴見大学文学部日本文学科内（西部）京都市東山区今熊野北日吉町三五京都女子大学内②予定なし
- 万葉学会①大阪府吹田市千里山東三関西大学文学部国文学研究室内②

- 一〇月六日③帝塚山学院大学
- 美夫君志会①名古屋市中区和区八重本町一〇―一二中京大学国文学研究室内②予定なし

- 和歌文学会①八王子市東中野七四二中央大学文学部長崎研究室内②九月二九―一〇月一日③北海道大学

☆☆

館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料として一号につき六〇円切手を同封して当館情報室までお申し込み下さい。

ISSNについて

本号から表紙右肩にISSN（国際標準逐次刊行物番号）を表示しました。逐次刊行物の識別や検索に利用される国際的コード番号です。

国文学研究資料館報 第十三号
 昭和五十四年九月発行
 編集・発行者
国文学研究資料館
 東京都品川区豊町一―六一―二
 郵便番号 一四二
 電話（七八五）七二二（代）
 印刷所 株式会社 三興